

20歳を迎えて

日本放射光学会会長
雨宮慶幸



下村理会長からバトンを受け取り、2007年1月から会長を務めることになりました。よろしく申し上げます。

放射光学会は今年で20歳を迎えます。まだ若いとはいえ、成熟期を迎えました。成熟した学会として今後の10年間、活力ある20代をどのように活発に学会を運営し、さらに発展させるか考えるべき重要な一つの節目を迎えていると思います。外国には多くの放射光施設がありますが、放射光学会を持っている国は我が国だけであり、本学会をどのように運営、発展させていくかを考える際に、見本や参考になる先例は世界には存在しません。その意味で、本学会は文字通りオンリーワンとしての自覚と責任をもって、学会活動を通じて放射光科学をいかに推進、発展させて行くかを真剣に考えるべき使命を持っていると思います。

私が会長を務める任期中に下記のことを目指したいと思います。

1. 他学会との連携の強化（放射光科学の先端性と裾の広がり両立を目指す）

本学会は「放射光」を共通のキーワードにする学会ですが、成熟期を迎えたこともあり、「放射光を使って当たり前」という実験の研究成果は本学会ではなく、他の学会で発表される機会が増えてきました。これは、会員数が頭打ちになっている一因でもあります。基本的には大変に喜ばしいことです。このことは換言すれば、本学会と他学会との間の双方向の風通しの良さがこれまで以上に求められる時代になったと言えます。すなわち、「放射光」に軸足を置く研究者とそれを単なる一つのツールとして利用する研究者の間の円滑な情報交流を可能にする仕組みが求められます。他学会に対して放射光科学の先端性を的確に情報発信し、また、放射光利用の研究成果の他学会および社会における位置づけに関する情報を的確に受信する仕組みが必要です。その為には、他学会との共同開催の研究会、他学会の年会等を活用した研究発表の機会を実現し、広い意味での放射光科学を発展させたいと思います。これらのことは、X線自由電子レーザーの利用研究を推進する上でも、また、新しい先端的リング型放射光源を実現する上でも重要な要件と考えます。

2. 若手研究者の育成

我が国の少子高齢化の波は、どの学会にも影響を及ぼします。優秀な若手研究者が集ってくるような刺激と魅力のある学会を目指す必要を感じます。ここ数年開催されてきた「若手を中心としたワークショップ」を相続し、更に発展させていきたいと思っています。

3. アジア・オセアニアにおける放射光科学のリーダーシップ

アジア・オセアニアにおける放射光施設の数が増えつつある現在、放射光科学の先進国としての日本の放射光学会がこれらの地域における放射光科学の推進にも貢献することが、期待されていると思います。昨秋にはアジア・オセアニアフォーラムが本学会がリーダーシップを取って正式に発足し、第一回ワークショップがつくばで開催されました。今後、このフォーラムがしっかり根付いて発展していくために、台湾での第二回ワークショップへの協力やサマースクールの立ち上げなどの活動を積極的に行っていきたいと思います。

4. 放射光施設間のシナプスとしての役割

これまで本学会は放射光施設が存在が基盤となって活動が展開されてきました。これからもこの構図は必要不可欠なものだと思います。放射光施設間には、あるときは競争 (Competition), また、あるときは協力 (Cooperation) が存在します。本学会は、それらの二つの C がバランスしてコヒーレント (Coherent) な発展に繋がるように、その間の情報伝達 (Communication) を果たす最も大切な C の役割が期待されていると思います。年会・合同シンポ等の機会を活用して、施設間および各利用者懇談会間の情報伝達 (Communication) の機能を果たすシナプスとしての役割を更に高めたいと考えています。

上記のことは、基本的には、直近の下村前会長をはじめ歴代の会長が目指してきたことと軌を一にしていると思います。しかしながら、20歳を迎えた今、これらのことに改めて顕在的に意識して取り組み、20代の新たな出発としたいと思います (残念ながら、私のことではありません!)。また、上記は、評議委員をはじめとする会員の皆様からの知恵と協力を得て初めて可能になると考えています。各幹事は以下の方々にお願いしました。百生敦 (東大) 庶務幹事, 澤博 (PF) 会計幹事, 山本雅貴 (理研) 行事幹事, 繁政英治 (分子研) 渉外幹事, 櫻井吉晴 (JASRI) 編集幹事。

幹事共々、よろしく申し上げます。